

第4章 今西錦司の種社会進化論 4. その批判の実態

今西進化論を批判する者のほとんどは、わが国の生態学の発展に悪影響を及ぼした、あるいは正統的進化論の導入を遅らせた元凶として今西進化論を槍玉に挙げる。これは、刃物は人を傷つけるので、刃物の研究をするのはまちがっているというのと同類の牽強付会な論理なのであるが、今西に対しては、別の角度から見ても大幅に的が外れている。“主体性”という特性が、理論のみならず生きかたにも溢れんばかりに表出していた今西からすれば、こうしたいわば被害的着想や告発そのものが、環境に翻弄される非主体的生きかたという点で、生命の本質と相容れないことになるからである。今西が決して被害的な態度をとらなかったことに着目すると、両者の隔たりの大きさが、多少なりともわかるかもしれない。

今西と一般の科学者の生きかたの違い

洋の東西を問わず、一般の科学者たちは、英文の論文を量産し、“国際的に活躍”しているとしても、探検的科学者の最たる存在である今西とは、目指すものが根本から異なっている。一方は現体制の中で認められる研究を行ない、あわよくば当該分野の研究史に名を残そうとするといった、自らの生きかたと研究とが分断されている生活圏の科学者であるのに対して、もう一方の今西は、探検的生きかたがそのまま研究につながっている芸術圏の科学者なのである。ひとことで言えば、無自覚的なものであるとしても、真理の探究を手段にするか目的とするかの違いということになる。

この問題を念頭に置いたうえで、『生物の世界』はきわめて高く評価されるにもかかわらず、その発展型である今西進化論が評価されないのはなぜなのか、という先の疑問に戻らなければならないのであるが、その前に、今西進化論に対する没論理的な批判をひと通り眺めておくことにしたい。その過程で、この疑問もおのずと解消されるかもしれないからである。

今西進化論に対する批判を扱う本章では、その没論理性を通じて、今西進化

論のどの部分が抵抗を呼び覚ますのか、逆に言えば、どの部分が重要性が高いのかという、最も肝心な点を浮き彫りにすることになるが、とりあえず次節では、没論理性が特に高い批判をいくつかとりあげ、それらを詳細に検討することにしよう。

種社会進化論に対する生物学者の態度

超常現象研究に対する批判者の発言には、理解に苦しむほど極端な誤りが数多く混入していることが異常なほどに多い。場合によっては、批判している相手の名前をまちがえる者すらある。今西進化論に対する批判の場合、そこまで極端ではないにせよ、少なくとも質的には同じことが言える。たとえば、今西の愛弟子である河合雅雄と川村俊蔵に師事した進化学者、佐倉統（東京大学大学院情報学環）は、『生物科学』今西錦司特集号の巻頭言「今西錦司再訪」の中で、信じがたい誤りを何重にも犯している。これは、今西進化論がまちがっているとしても、今西の生物学には見るべきものがあるので、その再評価を行なうために組んだという、その特集の趣旨を説明する文中で起こっているのである。今西を“救済”しようとする中で発生しているので、まさに皮肉と言うほかない。

今西は、生物界に頻繁に見られる利他行動や協利行動〔今西の言葉では、群れ本位の行動〕が自然選択では説明できそうにないから、ダーウィン進化論を批判した。ダーウィン自身も、利他行動の進化が自説の最大のネックのひとつだと十分自覚していた。しかしダーウィンは、みずから唱えた自然選択の「威力」にも自信をもっていた。何せ、30年近くもそれと共に生きてきたのだ。今西には、自然選択理論に対するそれだけの思い入れはなかった。違いはそこだけ、とも言える。今西はダーウィンと自然観が近かったからこそ、自然選択を否定したのである。（佐倉、2006年、129ページ。傍点＝引用者）

ここには、思わずわが目を疑うほどの誤りが、いくつも重なっている。佐倉は、今西の著作に強い関心を寄せ、その影響を受けて霊長類学を志したことを率直に認めている（佐倉、2000年、428ページ）し、この巻頭言でもふれているように、自ら高く評価する『生物の世界』の英語版の書評（Sakura, 2005）も

書いている。したがって、今西の考えかたを十分に承知しているはずであるし、現に、その6年前に発表した「科学と非科学のはざまで」という、中立的な立ち位置の論文(佐倉, 2000年)では、このような“曲解”はほとんど見られない。^[註1]にもかかわらず、本書をここまで読み進めればただちにわかるように、この巻頭言での佐倉の発言は、なぜか大幅にまちがっているのである。

それは、今西とダーウィンの違いを、何らかの理由から最小限のものにしようとする意図が働いた結果なのであろうか。考察を進めるに当たり、それらの誤りをあえて説明すれば、次のようになる。

今西がダーウィンの自然選択説を批判したのは、「利他行動や協力行動が自然選択では説明できそうにない」と考えたからでもなければ、「ダーウィンと自然観が近かった」ためでもない。それは、言うまでもなく、『生物の世界』に明確に述べられている通り、それよりもはるかに根本的なものである。「自然における變異は果して氣紛れな無方向なものであろうか」(今西, 1941年, 168ページ), そのはずはないというのが、その理由なのである。また今西は、「ダーウィニズムに立つかぎり、私の到達したような自然観には、達しえないはず」(今西, 1980年, 116ページ)として、偶然に依拠するダーウィンとは自然観が根本から異なっていることも強調している。^[註2]

また、ダーウィンが自然選択の「威力」に自信をもっていたという主張にも、確たる根拠はない。仮にそのような自信がダーウィンにあったとしても、それ

[註1] この論文がある意味で重要なのは、他の批判者と違って、よく言われるように今西の“全体論”が西田哲学や日本的な土壌から出たというよりは、「当時世界的に主流だった自然観——全体論的で調和的な自然観——に基づいている」(佐倉, 2000年, 446ページ)と的確に指摘していることであろう。これは、後にパメラ・アスキスが、今西が残した資料からあらためて明らかにした事実でもある(アスキス, 2006年; Asquith, 2007a)。

ちなみに、佐倉は、同僚たちとともに、*Nature* に発表されたベヴァリー・ホールステッドの今西批判についてコメントしているが、そこでも、今西進化論はダーウィンの進化論の一部にほかならないと主張している(佐倉ら, 1988年, 256ページ)。

[註2] では、ダーウィンは偶然という要因を中核にしてその進化論を構築したので、生活派科学者に入るのかと言えば、そうではない。ダーウィンがそうしたのは、それまでの神による創造説を反駁するために、目的や意志とは正反対の、偶然という要因に頼らざるをえなかったからなのであろう。したがって、ダーウィンの真意を汲めば、創造説に後戻りせずに進化が説明できるのであれば、「理論の奴隷」になり下がってまでして、偶然に依拠する自然選択説にいつまでも執着する必要はないことになる。

は『種の起原』の初版を出版した1859年頃に限られるであろう。その後、さまざまな指摘や批判を受ける中で、科学者としての良心に忠実であったダーウィンは、可能な限り事実に寄り添うべく、その主張を次第に後退させて折衷的な態度をとるようになり、理論的な破綻が起こることにも臆することなく、獲得形質の遺伝すら認めるまでになったからである。したがって、仮にダーウィンが、神による創造説の否定を自らの使命として、自然選択理論に最後の望みを託していたとしても、この理論とともに30年近く生きたことで、この説に、思い入れや自信をもっていたなどということはないのではなかろうか。

もう一方の今西は、自然選択という仕組みの存在自体を否定することはなかったものの、いわば徒弟時代に当たる「ヨーロッパにまるかぶれの時期」(今西, 1987年, 30ページ)を除いては、この仕組みや学説に積極的関心を寄せるはずもなく、したがって、それに対する思い入れなど生まれる余地もなかった。これまで見てきたように、進化の仕組みに関する限り、両者の違いは決定的に大きいのである。

今西が、同じナチュラリストとしてダーウィンとその自然観が近かったと仮定しても、それが自然選択説を否定した根拠になるという論理も奇妙である。仮に、ダーウィンが自然選択説に拘泥したのはこの学説に自信と思い入れをもっていたためであるのに対して、それらに対するこだわりのなかった今西は、利他行動や協力行動が説明できそうにない自然選択説を批判することになったのだとすれば、むしろダーウィンの理論のほうに分がないことになりかねず、意に反して現状の今西進化論を擁護する結果になってしまうおそれが、なきにしもあらずである。あるいは、佐倉の真意はそこにあったのであろうか。

今西の著作に強い関心を寄せたことから霊長類学を専攻するようになり、京都大学大学院で今西のふたりの愛弟子に学び、米本昌平のいた研究所で博士論文を書いたほどの進化学者が、ダーウィンと今西の著書のいずれについても、ここまでの“誤解”をするに至ったのは、なぜなのであろうか。「科学と非科学のはざま」論文では、これらの点のほとんどをきちんと把握しているように見えることからしても、通常の要因によるものとは考えにくいので、そこには、無自覚的なものであるにせよ、何らかの意図が関係していると考えべきなのではなかろうか。もしそうであれば、その“誤解”の方向には大きな意味があることになる。佐倉のいわば解釈をあらためて整理すると、次のようになる。

1. ダーウィンは、終生、自然選択説に自信をもっていた
2. 自然選択理論への思い入れという点を除けば、今西とダーウィンの自然観に違いはない
3. 今西がダーウィンの自然選択説を批判したのは、生物界で観察される利他的、協力的行動がこの理論では説明できそうにないと考えたためである

これらが、何らかの意図が働いた結果として生じたものであれば、うそをつくには本当のことを知っている必要があるのと同じ道理で、対象を正確に把握していることになるし、それとは正反対の思い込みを作りあげた可能性が高い。そうであれば、それぞれの項目は次のようになる。

1. ダーウィンは、自然選択説に、少なくとも途中から自信を失っていた
2. 今西とダーウィンの間には、根本的な点で大きな開きがある
3. 今西がダーウィンを批判したのは、利他的、協力的行動が説明できないためではなく、もっと根源的な理由がある

このように整理してみると、これらは、ふしぎどころか、むしろ当然の帰結であるし、今西の主張とも同じであることがわかる。そして、このうちの2と3は、佐倉自身が「科学と非科学のはざままで」論文に記述している内容と通底するのである。

本例がその好例になるであろうが、一般に、何らかの理由から今西進化論を否定する人々は、意識の上ではともかく、心底では今西進化論の主張を正確に把握しているがゆえに、その内容を無意識のうちに歪めていることになりそうである。これは、序章で説明しておいたように、幸福否定の仕組みそのものか、少なくともそれと相同のものとと言える。ここでの要点は、否定するのは重要な部分に限られるということであり、したがってそれは、ある明確な目的に沿って行なわれているということである。たとえば、ダーウィンの自然選択説に対する自信を次第に失っていったことは、否定しようのない歴史的事実であろうが、そのことをそのまま認めると、自らの主張に何らかのふつごうが生ずることなのであろう。ここでの要点は、言わずと知れた、自然選択説ひいては唯物論的世界観をめぐる対立ということである。

今西進化論を否定する場合、定説的進化論との関係という点で正反対に位置

づけられるふたつの戦略のあることが、ここであらためて明らかになる。今西進化論は、(1) 表面的には違って見えるが、根本的にはダーウィンの考えと全く、あるいはほとんど変わるところがないため、結局はダーウィニズムに吸収されてしまい、独自性はないので意味はないとするものと、(2) 今西進化論は、ダーウィニズムとは根本から異なっているところがあり、その主張の裏づけとなる科学的根拠がないのでまちがっているとするもの、のふたつである。

この場合、ダーウィニズムとネオ・ダーウィニズムという、内容の少々異なるふたつの定説的学説があるので、実際にはもう少し複雑になるが、昨今の進化学者が本来の意味でのダーウィニズムを問題にすることはほとんどないであろうから、佐倉のように特にダーウィンの考えと明示している場合を除けば、ネオ・ダーウィニズムを対象にしていると考えればよい。

では、佐倉の場合は、この(1)と(2)のどちらに分類したらよいのだろうか。岸由二は、「窮屈な全体論的哲学」を放棄してしまえば、棲みわけ論や生物社会学は、ダーウィニズムと和解してしまう(岸, 1982年, 63ページ)ので、受け入れられやすくなると主張する。そうすると、今西進化論は特定の側面で定説と食い違いがあるものの、その問題が解消しさえすれば定説と対立しなくなると主張している点で、佐倉と岸の立場は共通することになる。

科学者とされる者で、表立って今西進化論の批判をしているのは、主として、岸や初期の柴谷篤弘、やはり初期の池田清彦、佐倉、徳永幸彦、ベヴァリー・ホールステッド、河田、粕谷英一(新潟大学理学部)、伊藤嘉昭^[註3]であろう。これらの生物学者を、今西進化論と定説との関係をどのように把握しているかという点で分類すると、比率や濃淡が異なるため、かなり恣意的なものにならざるをえないが、おおよそ表4-1のようになる。

[註3] 河田は、ダーウィニズムやネオ・ダーウィニズムという言葉は、「無意味な論争を巻き起こすことがある」ためもあり、今後は使わないほうがよいと主張している(河田, 1985年, 75ページ)。しかしながら、他に適切な用語も思い当たらないし、その必要があるとも思えない。

[註4] それぞれ、参照すべき邦文の文献をあげておくと、池田清彦(1986年, 51-57ページ)、伊藤嘉昭(1990年; 1992年; 2003年a; 2003年b, 303-307ページ; 2006年)、粕谷英一(1992年, 69-75ページ)、河田雅圭(1985年; 1989年, 219-224ページ; 1990年, 188-198ページ; 1992年; 2003年a; 2006年)、岸由二(1982年; 1987年; 1990年; 1991年; 1992年)、柴谷(1981年; 1982年)、徳永(2001年, 78-81ページ; 2006年)、ホールステッド(1985年; 1988年)である。

**表4-1 今西進化論と定説との関係に関する
研究者による把握のしかたの違い**

	定説と同じ	一部にせよ定説とは根本から異質	比率はそれぞれ異なるが、双方の戦略を使っている
研究者名		ホールステッド、初期の池田清彦	岸由二、初期の柴谷篤弘、河田雅圭、佐倉統、粕谷英一、徳永幸彦、伊藤嘉昭

これを見ると、今西進化論はどこを見ても定説と同じかほとんど同じという主張のみの者は当然のことながら存在せず、多くの批判者が、先の（1）と（2）の両方の戦略を

使っていることがはっきりする。そして、これらの批判者の主張は、ほとんどの側面が根本から異なるというものと、一部は異なるが、それを除けば定説と同じというもののいずれかに分類されるのである。このように双方の戦略を併用している者のほうがはるかに多いのに対して、一方の戦略しか使っていない批判者はあまりおらず、ホールステッドと初期の池田のふたりにとどまるように思う。

双方の戦略を使っている者の場合、今西進化論はどの点で定説と相容れないとみているかという点に着目すると、ほとんどは、変わるべき時が来たら、同種の全個体が一斉に変化するという考えかたを含めた“全体論”哲学と、自然選択説では進化が説明できないとする主張のいずれか、あるいは双方を問題にしていることがわかる。要するに、今西の“哲学的”姿勢を問題にしており、その姿勢さえなければ、基本的な点ではダーウィニズムと変わらないと考える者が多いということである。柴谷は、親今西となった後でも、「ダーウィンの進化論と今西の進化論は同根である」と主張していた（今西、1987年、83-84ページ）というが、今西の陣営に属して以降も、なおかつ定説と共通する部分を残しておきたいという思いがあったのかもしれない。

今西の生物学がダーウィニズムと異なる点は“全体論的哲学”以外にないという主張を逆から眺めれば、この“全体論的哲学”に対して、政治的理由とは無関係に、強い抵抗が働いているということになりそうである。

ほとんどの批判者は、わが国の生態学の発展に悪影響を及ぼした、あるいは正統的進化論の導入を遅らせた元凶として今西進化論を槍玉に挙げる。本来は、科学の枠内で議論を終始させるべきであるにもかかわらず、このように